

# 令和元年度 第6回全校研究会報告

## 日時 令和2年3月 23 日(月)13:10～16:00

指導助言 立命館大学産業社会学部教授 青山 芳文 氏

京都府教育庁指導部特別支援教育課指導主事 荒川 喜博 氏

第6回の全校研究会では、研究テーマ「地域社会との連携協働の下で創造する喜びをともにする授業～多様性は可能性～」における2年間の成果と課題を共有することを目的とし、キーワードの「社会に開かれた教育課程」「カリキュラムマネジメント」について各学部から実践報告を行いました。その後、立命館大学青山教授、京都府教育庁指導部特別支援教育課荒川指導主事から指導助言をいただき、次年度以降研究の方向性を確認しました。

### 実践報告 「地域社会と連携協働の下で創造する喜びをともにする授業～多様性は可能性」

#### ●小学部4組 生活単元学習「おそうじ大作戦」

生活単元学習「おそうじ大作戦」に通年で取り組んできました。小学部ではわかりやすい教材を使用し、安心感のある環境の中で自信を付けることを大切に授業作り進めてきているため、教室での基礎的な取組から活動場所を広げていくという工夫をしています。最初は、まっすぐ雑巾がけができるような教材を作成し掃除のスキル向上に取り組んでいましたが、終わりやできたという達成感が感じづらいという課題もありました。そこで、遊びの後に掃除をするなど、活動に必然性がもてるような設定に変更したり、友達と協力したりする場面を設けました。そのことで、児童が友達を見て学ぶ姿や、互いに声を掛けたりする姿が見られるようになりました。また、この授業だけでなく家庭でも掃除をしようとする姿が見られるなど、児童の生活に汎化している様子が多く見られました。



#### ●中学部3組 生活単元学習

中学部3組は、全員が3年生のクラスです。授業を作る際には、その授業に取り組む生徒の目的から出発し「自分でやりきる」「自分でどこまでやるかを決める」という経験を大切に、必ず「できた」で終われる授業改善に取り組みました。また、生活単元学習で取り組んだ内容を行事に生かすことにより、行事や初めての場所が苦手な生徒も、自分から楽しむ姿が見られ行事の終わりには「もう終わり？」と聞く姿が見られました。このことから、「なにができるようになるか」を明確にして授業に取り組めたことや生活年齢（学年）を意識して同じ生活課題で授業に取り組めたことが生徒の変容に繋がったのではないかと考えます。この2年間の研究をとおして、今後中学部では卒業を見据えた大切にしたい力を検討していきたいと考えています。



### ●高等部 3組 作業学習「メモ作り」

高等部 3組は、一定時間自分から作業に向かう力、「ありがとう」といわれる中で、自信をつけ人と適切に関わる力を付けることを目標に1年間作業学習「メモ作り」に取り組んできました。生徒の実態に合わせて「製品作り→相手に渡す→相手に感謝される」という流れを1時間の授業の中に設定しました。そのことで、見通しをもって活動に取り組めるようになりました。授業を進める中で、生徒がどこで困っているのかをアセスメントすることや自助具の作成、教材の工夫などの授業改善に取り組んできました。

その結果、安定して活動に参加することができるようになり、相手を意識して物を渡すことができるようになりました。また、作業学習の時間以外にも朝の会の司会を一人で自信をもって取り組むことや、学級以外の友達とも活動できるなど生徒の活動に広がりが見られました。加えて、進路先とも連携し卒業後の仕事へとメモ作りを繋げることができました。



### 指導助言 立命館大学産業社会学部教授 青山 芳文氏

今回の研究で協議してきた「授業づくり」のポイントを6点に絞って教えていただきました。

#### ポイント



- ・子供自身がわかって動ける環境、授業づくりにする
- ・自分らしく人ともに主体的に生きていくための発達のための土台の充実のために、遊びの活用を大切にさらに発展させること。
- ・本物の生活を題材にして活動する生活学習、総合学習を充実させる。
- ・人の役に立っていることを実感できる題材、活動内容を開発し実践していく。
- ・発達と教科野志店を明確に持った、『わかる』喜びを感じられる学習を開発すること。
- ・子どもの理解や指導内容の設定にあたっては、達成度だけでなく発達の視点を持って吟味する。

### 指導助言 京都府教育庁指導部特別支援教育課 指導主事 荒川 喜博 氏

社会に開かれた教育課程をとおして、地域に開かれた学校づくり、豊かな生活を営むことを目指して新学習指導要領が制定され、特別支援学校の社会の役割が大きくなってきている。児童生徒の将来を具体的に描き、それに向けて組織的に授業を配置していくことが大切である。見て、聞いて、触ってわかる授業をとおして、子ども達がどのように思考をくぐらせているのかを考えることが大切である。来年度以降は、各学部の目標を意識ながら12年間を繋げた教育を学校全体で進めていってほしい。



小学部の児童にとっての「社会貢献を実現するための指導」として年間を通じて学習活動が設定されていてわかりやすかったです。小学部の児童にとっての「必然性」→「場を広げる」の流れから「つきたい力」へとつながったように思います。学校以外で生かせる力がつながったことは、中・高等部へもつながる取組だと感じました。

生徒の目的（生活上の目標と課題）をしっかりとち、単元同士のつながりを意識し、これまでに身につけた力を発揮できるように設定されており、中学部の生徒にとって「社会貢献を実現するための指導」となっており、特に高等部（進路）につながるものでした。4点セット（年間指導計画、教科・領域等関連表、授業改善シート、児童生徒変容エピソード）を有効的に活用し、授業改善が進み、生徒たちの大きな変容へとつながったと感じました。



見てわかりやすい活動となるためにつみあげてきたこと（一人でできる工夫、表紙の色、丁寧なアセスメント、スモールステップ）により、生徒の変容につながったと感じました。「わかって動ける」からこそ「自分でできた」となり、それを「ありがとう」と言われることで、この生徒たちにとって「社会貢献を実現するための指導」につながったと思います。この単元、授業でつけた力、志との自信が進路先へもつながったことは大きな成果だと思います。

地域社会と連携協働した教育活動を行い、児童生徒の能力や可能性について共感的理解ができたことは大きな成果だと思われる。教育課程の改善、授業づくりにおいても授業改善シートや変容エピソード、教科・領域等関連表の活用によってプラス面が多く見られた。向日が丘で積み上げてきた実践や授業者の創意工夫を大切にしたい。



児童生徒一人一人の「社会貢献」は児童生徒によって違ってくると思います。その子にとっての「社会貢献」とは何なのか、そのためにはどのような力をつけさせるべきなのかを常に考えて授業を行っていく必要があります。また、児童生徒の可能性を最大限に広げていくためにも「どうすれば目標やねらいに近づけるのか」を考えた授業改善を行っていきたいです。